「つくばマップ」42年の歴史

キャンパスの「今」を記録し続ける

1981年の本紙（新入生歓迎号）から掲載が始まったつくばマップ（旧いらすとまっぷ）。今年4月発行の第376号まで42年間にわたり、つくばの「今」を記録してきた。当時の読者や編集部員に利用法や製作の裏側を取材するとともに、89年、2000年、23年のマップから筑波キャンパス周辺を抜き出しその変遷を紹介する。（川上真生、吉川祐）

内海真生教授（生環系）は1988年度入学。広島県出身でつくばには土地勘が全くなかった。

「平砂学生宿舎に入ったが、日々の生活は宿舎と校舎の往復が中心だったお店の情報などは限定的。当初の行動範囲は宿舎周辺に限定されていた。だが、マップを見てさまざまなお店の存在を知り、春日や吾妻、竹園などへも足を伸ばすようになった」と振り返る。

2002年に本紙編集長を務めたわった齋藤章太さん（同20年度比較文化学類卒）は「つくば市は学生や研究者が多く、人の入れ替わりの激しい『通り過ぎていく街』という認識があった。マップを通じてつくばに愛着を持ってほしかった」と製作に込めた思いを語る。

松尾洋平さん（平成15年度人間学類卒）は入学後、追越学生宿舎に入った。当時は宿舎の壁にマップを張る学生が多かったという。「つくばエクスプレス（TX）が開通しておらず、当時はつくば市内で生活が完結していた。マップが自分たちの生活圏そのものを示していた」と話す。

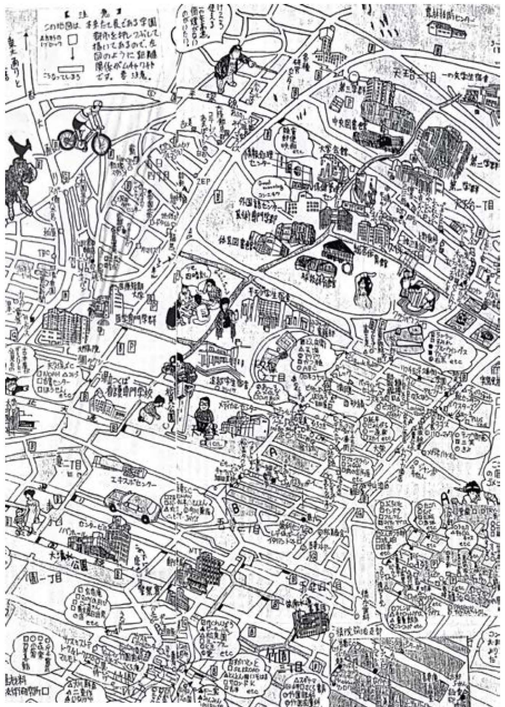
05年8月のTX開業後、つくばの人の流れに変化が生じる。

07年の副編集長でマップ製作に関

08年までマップは手書きで、芸術専門学群の学生に編集部から作成を依頼していた。

09年にマップをデジタル化した元イラスト担当の奈須野香さん（同22年度芸術専門学群卒）は「見やすくて、更新もしやすいと考えた」という。スマートフォンが登場し始めた時代だが、「まだ身近ではなく、新入生がお店を知るためにより活用してくれた」と言う。

スマホが普及した現在は、店舗検索が簡単にできるため、かつてに比べればマップの需要は高くない。だが、嘉元愛香・現編集長（心理3年）は「紙面の形で現在を記録することは、後世に伝えるために意義がある。50年後にもマップが掲載され続けてほしい」と願っている。



1989年に掲載のマップ

学生と街の出会い演出:マップの変遷を紹介

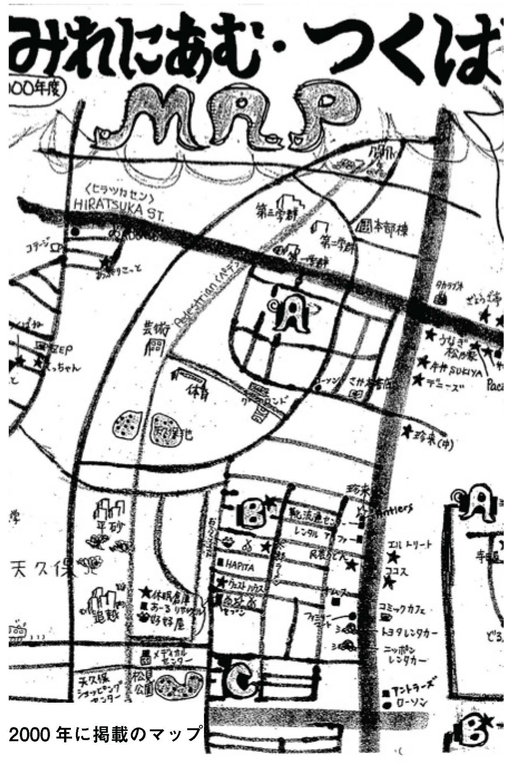
手書きで書かれた1989年（左上）のマップ。建物の描きぶりが立体的で、製作者の声を代弁するとおぼしきキャラクターも登場。情報を伝えようとする熱量が半端ない。

世紀の変わり目となる2000年（右下）のマップは、地図が平面化したが、建物の位置は分かりやすく描かれている。

最新版となる23年（左下）のマップは、デジタル化したことで、紹介する店舗の位置情報がより正確になった。スマートフォンで店舗情報は簡単に検索できるが、キャンパス周辺の状況を一覧できるのは、マップならではだ。

23	2000	89	81	1973	
マップ（左下）	マップ（右下）	マップ（左上）	いらすとまっぷ（つくばマップ）誕生	筑波大開学	マップ年表

2023年に掲載のマップ



2000年に掲載のマップ

つくばマップでたどる学生生活の変遷
筑波大生支えた店主ら　大いに語る

毎年4月に本紙が掲載する「つくばマップ」は、筑波大の新入生にとって必需品だ。1981年から、編集部員がキャンパス周辺を探索し、飲食店や主要施設などを紹介してきた。マップの変遷は筑波大生の暮らしの変遷そのものだろう。初期からマップに登場し、本紙連載「桐の葉と兵たち」でも紹介した3店舗の関係者と卒業生に、思い出や筑波大生への期待などを語り合ってもらった。

【司会は本紙記者・吉川祐＝第2類1年】（座談会は8月6日、本紙編集室で開催）

卒業生と今もつながる

座談会参加者

◇軽食・喫茶　CLARET（つくば市天久保）宮下友邦さん・宮下民子さん

1978年創業。店舗は平塚通り沿い。学生の日常生活に耳を傾け、親身に対応する姿から、2人を「つくばの両親」と呼ぶ卒業生も。

◇自転車店　井上サイクル（同）　井上康男さん

1979年創業。CLARETとはビル1棟を挟んでお隣同士。康男さんは店長を長男に譲ったが、筑波大生の自転車生活を今も支え続けている。

◇洋服リサイクルショップ・古着屋MPH（同）　松本美砂さん、田中みどりさん、田中英則さん

田中みどりさんが1988年創業。店舗は天久保大学通り商店街。現店長は松本さん（平成11年度芸術専門学群卒）で、アルバイトとして学生時代から店舗に出ていた。英則さん（昭和54年度環境科学修了）はみどりさんの夫。

◇平野国美さん（平成3年度医学専門学群卒）

学生時代からCLARETの常連。訪問診療専門クリニック「ホームオン・クリニックつくば」院長。著書にドラマ化された「看取りの医者」や「70歳からの正しいわがまま」など。

◇中島光夫さん（平成27年度システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻修了）

元筑波大学新聞編集部員。

◇原啓一郎さん（平成26年度社会学類卒）

元筑波大学新聞編集長。

田中みどりさん

松本さん

田中英則さん

TX開通で「コート売れた」

司会　長く筑波大生の暮らしを支える中で、忘れがたい出来事は？

井上　あっという間に過ぎるが、学生のバイクチームをサポートしていたことだ。私の避暑と吉希の時には、彼らがホテルで祝賀を開いてくれた。結婚式に招かれ、北海道や三重なども訪れた。

宮下民　つい先日、うちのお店でアルバイトして知り合ったカップルが還暦報告に来てくれた。卒業生とのつながりは多い。

田中み　歴代のバイト生はほとんどが筑波大学術専門学群が多く、開店当初からお店のレイアウトや値札のデザインなど、店を一緒に作り上げてきた。その時の人たちとは今も一緒に旅行に出かけたりしている。

司会　卒業生の皆さんの学生生活は？

中島　休み時間は自転車で教室移動。自炊をせず、夜も自転車でお店巡り。CLARETにはビル1棟を挟んでお隣同士。康男さんは店長を長男に譲ったが、筑波大生の自転車生活を今も支え続けている。

平野　CLARETには学生時代、週に4回通うほどお世話になった。間違った道を進みそうになった時、おっ人はそれを正してくれる存在。今や新聞を読んでいる姿も見

井上さん

スマホが変えた学生生活

司会　かつてと比べ、学生が変わったことは？

宮下友　食事中でもスマートフォンを見ている学生が多く、声を掛けにくい。情報はたくさん入るのだろうけど、スマホがない人落ち着かなくなっている。本館付近で止まっていた。周辺は水はけが悪く、長靴で登校する学生も多かった。自転車がパンクして、修理に来る客も絶えなかった。

司会　街そのものの変化はどうか。

松本　お店が入居する天久保ショッピングセンターは古本街だったが、古書店は消えてしまった。

井上　開業当初、店の前の平塚通りは西大通りとほとんどつながっておらず、大学会館付近で止まっていた。周辺は水はけが悪く、長靴で登校する学生も多かった。自転車がパンクして、修理に来る客も絶えなかった。

松本　店員に話しかけられたくないという風潮は出てきたかもしれない。

田中み　諦めずにこちらから話し掛けている。

井上　スマホの普及など学生を取巻く環境は変わっても、筑波大生からではの一喜一憂は変わっていないのでは。

宮下民　つい先日、うちのお店でアルバイトして知り合ったカップルが還暦報告に来てくれた。卒業生とのつながりは多い。

田中み　歴代のバイト生はほとんどが筑波大学術専門学群が多く、開店当初からお店のレイアウトや値札のデザインなど、店を一緒に作り上げてきた。その時の人たちとは今も一緒に旅行に出かけたりしている。

「重食」食べ歩いた

原　東京に住むようになって思うのは、つくばの物価の安さ。筑波大周辺のお店は良心的な価格で出してくれるところが多かった。

宮下友　「重食」と言われるけど、そんなことはない。若い人に食べてほしい、肉と骨にしてほしいと思って提供している。かつては、ピラフ大盛と定食を一度に平らげる学生もいた。

平野　CLARETには学生時代、週に4回通う。情報はたくさん入るのだろうけど、スマホがない人落ち着かなくなっている。本館付近で止まっていた。周辺は水はけが悪く、長靴で登校する学生も多かった。自転車がパンクして、修理に来る客も絶えなかった。

司会　かつてと比べ、学生が変わったことは？

宮下友　食事中でもスマートフォンを見ている学生が多く、声を掛けにくい。情報はたくさん入るのだろうけど、スマホがない人落ち着かなくなっている。本館付近で止まっていた。周辺は水はけが悪く、長靴で登校する学生も多かった。自転車がパンクして、修理に来る客も絶えなかった。

中島さん

原さん

司会　今後の筑波大生に期待することは？

宮下友　もっともっと失敗をしてほしい。

宮下民　今の学生は成長できる機会になる。

田中英　真面目に悩みすぎて、自分のしたいことをしてほしい。

平野　開学から50年が経過し、価値観も多様化した。大学が意図していないような人材も現れてくるのではないか。

原　私自身、失敗を重ねてきたが、自分の好きという気持ちに正直で良かったと感じている。筑波大生は一人一人が個性を持っている。胸を張ってできまきまなことに挑戦してほしい。

司会　今回の対談を通じて何を感じたか。

原　TXの開通が学生活を大きく変えたと感じた。都心に行きづらかったTX開通前を知らないが、「つくば」で何かをやろう」という気概を持った学生が多かったように思う。

松本　今昔を学生の可処分時間はそう変わらないとして、スマホもTXもなく、つくばは「陸の孤島」と言われた時代は、入ってくる情報も少なかった。暇で余白があったからこそ独自の面白いものが生まれるということもあったと思う。

司会　久しぶりにキャンパスを訪れて、卒業生の皆さんはどう感じたか。

中島　ジャージ姿で自転車をこぐ学生を見て、「ああ、つくばだな」と感じた。樹木が多く森のようなキャンパスの雰囲気は、変わらないでいてほしい。

司会　今後の筑波大生に期待することは？

宮下友　もっともっと失敗をしてほしい。

宮下民　今の学生は成長できる機会になる。

田中英　真面目に悩みすぎて、自分のしたいことをしてほしい。

平野　開学から50年が経過し、価値観も多様化した。大学が意図していないような人材も現れてくるのではないか。

原　私自身、失敗を重ねてきたが、自分の好きという気持ちに正直で良かったと感じている。筑波大生は一人一人が個性を持っている。胸を張ってできまきまなことに挑戦してほしい。

司会　今回の対談を通じて何を感じたか。

原　TXの開通が学生活を大きく変えたと感じた。都心に行きづらかったTX開通前を知らないが、「つくば」で何かをやろう」という気概を持った学生が多かったのではないか。

平野　スマホ一つをとっても、世代間で受け止め方が違うことが面白かった。同じ日本人でも、世代は全く違う民族を創り出す。

司会　これからお店をどうしたいか。

松本　学生との出会いは面白い。私自身の見聞も広げてくれる。これからも出会い楽しみたい。

井上　お店に訪れる人を全員筑波大生にする。そのくらいの心構えで、親身に筑波大生に向き合いたい。

宮下民　今の学生は大人と話す機会が少ない。だからこそ、店を会話が生まれる場所にしていきたい。

宮下友邦さん

平野さん

宮下民子さん

広告欄

掲載のお問い合わせは

shinbun@un.tsukuba.ac.jp

までお願いします。